

2021年3月4日
NHK広報局

3月会長定例記者会見

Q. 東日本大震災10年について

A. (前田会長) 東日本大震災の発生からまもなく10年になります。NHKでは、1月から「あの日、そして明日へ～それぞれの3654日」をキャッチフレーズに、さまざまな番組などを放送してまいりました。3月11日は、各放送波で集中的に特集番組を放送いたします。「ニュース7」では、放送枠を午後8時45分まで拡大し、NHKがこれまで蓄積してきた映像や、被災した方々の証言、原発事故の課題や教訓などをお伝えします。「おはよう日本」、「ニュースウォッチ9」でも、過去の検証とともに、被災地が未来に向かってどう歩みを進めて行くか、視聴者の皆さまと一緒に考える報道を行っていきます。ラジオ第1やFMでも、生放送の特集番組をお届けします。インターネットでは、「NHK NEWS WEB」内に特設サイト「東日本大震災 あの日から10年」を立ち上げ、さまざまなコンテンツを展開する予定です。

「NHKスペシャル」は、3月6日から14日まで8本を放送します。未曾有の災害から暮らしや生業を取り戻そうとする人々の姿がある一方で、思うように進まない復興の実情も見えてまいりました。

このほか、民放5社と共同で取り組む防災プロジェクトも始まります。NHKで3月14日に放送する「あしたの命を守りたい」では、NHKと民放各局の震災取材経験者が集まり、未来の命を守るために私たちに何ができるかを考えます。

先月、東北地方で震度6強の地震がございました。災害はいつ襲ってくるかわかりません。NHKは、10年間の取材の積み重ねを防災・減災にいかし、これからも「命と暮らしを守る」報道を続けてまいります。

Q. 「NHKプラス」サービス開始から1年について

A. (会長) 常時同時・見逃し番組配信サービス「NHKプラス」は、昨年4月の本格サービスに先立ち、3月1日から試行的なサービスを始めました。1年が経ちまして、いつでも、どこでも、NHKのコ

コンテンツに触れていただけるサービスとして、ご利用いただいております。先月2月末までのID登録申請はおよそ151万件、登録数はおよそ122万件となっております。配信率は、同時配信の時間で計算いたしますと、2月は総合テレビが96%、Eテレが74%となっております。年末の紅白歌合戦やニュース番組、大河ドラマや朝の連続テレビ小説など、「NHKプラス」で多くの番組をご覧いただきました。権利者や権利者団体の皆さまのご理解をいただき、多くの番組を配信することができたことに、改めて感謝を申し上げます。今後とも、サービスの意義を丁寧に説明し、より多くの番組を配信できるように努めてまいります。

「NHKプラス」を利用されている方からは、外出先や録画をし忘れた時にも番組を見ることができて便利だといったご意見をいただいておりますが、引き続き、サービスの改善に努め、NHKのコンテンツをより多くの方に触れていただきたいと考えています。

また、これまで「NHKプラス」では、南関東エリアで放送された番組を配信してきましたが、きのう3月3日から、地方向け放送番組の見逃し配信が始まりました。詳細につきまして担当者から説明します。

(担当者) 地方向け放送番組の見逃し配信についてご説明します。

「NHKプラス」では、南関東エリアの1都3県向けに放送している番組を配信し、それ以外の地域の番組は全国放送になったものを配信してきました。利用されている方からは、お住まいの地域の番組を見たい、あるいは、ふるさとの番組を見たいという声が寄せられていました。そこで、きのうから、全国では放送していない地方向け番組の一部を見逃し配信するサービスを始めました。ご覧いただくためには、たとえば、スマートフォンの「NHKプラス」の画面の左下にあるプレイリストをタップしますと、見逃し配信番組をまとめたプレイリストが並んでいます。これを下にスクロールしますと、地域向け番組のプレイリストが出てきます。プレイリストは、ブロック別で全国を8つのエリアに分けて表示しています。北海道エリア、東北エリア、関東甲信越エリア、東海・北陸エリア、そして、関西エリア、中国エリア、四国エリア、九州・沖縄エリアとなっております。たとえば、関西のエリアのプレイリストを開いてみますと、大阪拠点放送局で放送した番組や、関西地方を取り上げた全国放送の番組が並んでいて、地域の括りで一覧的に見ることができます。先週金曜日に放送された「漫才祭り2021」や、きのう、大阪で放送された「ええ

トコ」などが並んでいて、番組をご覧いただくことができます。当面は、拠点放送局で放送した金曜夜7時半からの番組を中心に配信します。その後、運用を重ね、徐々に配信本数を増やしていきたいと考えています。具体的には、地域放送局で放送した金曜夜7時半からの番組や、一部の拠点放送局の夕方6時台のニュース番組も配信していきたいと考えております。地方向け番組の配信は、地域の魅力を全国の皆さまに知っていただくのと同時に、地域の課題に向き合っている方々の取り組みを、番組の視聴を通して共有していただくことで、課題解決のヒントとして役立てていただけるのではないかと考えております。

なお、地方向け番組の配信をアプリで見るためには、地域配信の機能を加えた新しいバージョンの「NHKプラス」アプリにアップデートをする必要があります。ウェブでご覧になる場合は更新の必要はありません。

(会長) NHKでは、3月11日の東日本大震災10年に向けて、さまざまな番組を放送していますが、「NHKプラス」でも関連する番組を集めたプレイリストを設け、震災関連の番組をご覧いただけるようにしております。

また、4月からは、同時配信の時間を1時間延長し、午前5時から深夜0時までの19時間程度とする予定でございます。「NHKプラス」をより多くの方にご利用いただければと思います。

Q. 「NHKプラス」の登録数122万件についての受け止めは。

A. (会長) スタートした時の勢いから言いますと、もうちょっと行ってもよかったのかなと思いますが、私も手続きをしてみても、結構面倒なんです。本人を確認するためのいろんな作業があるんですが、作業が複雑で、一度で済まないというのが相当ネックになっていると思っています。登録申請数と登録数が30万件ぐらい差がありますが、すぐにパッとできないんです。いろいろ工夫をしているんですけど、私から見ても、もうちょっと簡単にできないのかなというのが率直な感想です。それができないと、なかなか普及しないなと思いますので、相当改善はさせましたが、そう簡単ではないということです。

Q. この1年間で、どんな番組がよく見られたのか。

A. (担当者) 同時配信・見逃し番組配信を合わせまして、この1年間で最も多く見られた番組は、紅白歌合戦です。同時配信で言いますと、ニュースやスポーツなど、最新の情報を伝える番組が比較的によく見られました。特にニュースでは、去年4月の緊急事態宣言の時とか、

災害時、さらに政治や海外を含めて大きな動きがあった時は、特設ニュースなどの番組が同時配信でよく見られました。一方、見逃し番組配信では、ドラマ、エンターテインメント、ドキュメンタリー番組などが比較的多く見られました。特に、大河ドラマ、朝の連続テレビ小説は見逃し番組配信でよく見られていますし、この2つの番組は同時配信でもよく見られました。Eテレでは、「100分de名著」も比較的よく見られました。

Q. 総合テレビに比べて、Eテレの配信率が低い理由は。

A. (担当者) Eテレの配信率が低いのは、小学校、中学校、高校の教育関連の番組を配信していないからです。小中高校の教育番組については、すでにNHKオンラインで、「NHK for School」とか「高校講座」などで、いつでも見られる状態にしておきましたので、「NHKプラス」の開始にあたって新たな権利を取得しないで、ご利用いただいています。ただ、新たに制作する番組については、「NHK for School」などとともに「NHKプラス」の配信権も獲得していますので、徐々に配信される番組数は増えていくのではないかと考えています。

Q. 第72回日本放送協会放送文化賞について

A. (会長) 第72回日本放送協会放送文化賞の受賞者が決まりました。1949年に創設したこの賞は、放送事業の発展や放送文化の向上に功績のあった方々に贈呈しています。選考委員会を開き、有識者の方々の意見を伺いながら、受賞者を決めさせていただきました。今年の受賞者は7人でございます。7名の方のご紹介は、選考委員長である副会長からさせていただきます。

(正籬副会長) それでは、五十音順にご紹介します。

脚本家の大石静さんは、連続テレビ小説「ふたりっ子」や、大河ドラマ「功名が辻」、ドラマ10「セカンドバージン」など、人間の奥深さを描いたテレビドラマで視聴者の心を捉え続けています。

俳優の北大路欣也さんは、1968年に主演した「竜馬がゆく」から、今年の「青天を衝け」に至るまで、半世紀以上にわたり、9本の大河ドラマに重要な役どころで出演するなど、活躍を続けています。

NHK大相撲中継専属解説者の北の富士勝昭さんは、横綱経験者ならではの技術解説や、相撲界の奥深い伝統や慣習を踏まえたコメントで、相撲ファンの高い支持を得ています。

シンガーソングライターで小説家のさだまさしさんは、「NHK紅白歌合戦」に20回出場しています。また、今年で16年目を迎える「今夜も生でさだまさし」では、軽妙な話術で日本全国の視聴者に寄り添い続けて人気を得ています。

昭和女子大学客員教授の杉田敏さんは、国際ビジネスマンの経験を生かして、通算30年以上にわたり、ラジオ第2「ビジネス英語」の講師を務め、生きた英語と国際人としての教養を伝え続けてきました。

国立研究開発法人 情報通信研究機構 耐災害ICT研究センター長の鈴木陽一さんは、音響研究の第一人者として、放送の音の大きさを揃えるための基礎となる研究を手がけるなど、放送技術の向上に貢献しています。

俳人、エッセイストの夏井いつきさんは、「俳句王国」、「天才てれびくん」、「夏井いつきのよみ旅」など、30年以上にわたり、さまざまな番組で俳句の魅力を伝え続け、愛媛県松山市を拠点に俳句ブームを牽引しています。

贈呈式は3月19日の放送記念日の記念式典で行います。

Q. 8K技術の防災への活用について

A. (会長) NHKでは、1人1人の「安全・安心」を支え、日頃からの災害への備えにつながる取り組みを進めております。そのひとつとして、子どもたちに防災について考えてもらう学校放送番組から、8KCG映像を使って、富士山の噴火への備えを伝える番組をご紹介します。詳しくは担当者から説明いたします。

(担当者) Eテレ学校放送でお馴染みの「がんこちゃん」と一緒に防災について考える番組「もしものときのがんこちゃん」では、富士山の噴火について、8KCG映像などを使って、噴火の想定や避難行動などについて紹介します。番組で取り上げる富士山の「赤色立体地図」は、地形からわかる過去の火口や溶岩流の跡をよりわかりやすく表現するために、地形の数値データを8KCGで可視化したものです。さまざまな大きさや形の火口の跡などを8Kで可視化することで、富士山とその周辺の地形の様子を広い範囲で精緻に映し出すことができ、過去の富士山噴火の痕跡をより生々しくリアルに捉えることができます。

8K番組「もしものときのがんこちゃん 富士山が噴火したら」では、8KCGなどとともに、がんこちゃんと一緒に、火山が噴火した時、

灰が降ってきた時など、子どもたちがどんな行動をとればよいのかを考えます。番組やその一部は、Eテレや「NHK for School」でも放送・展開するほか、周辺自治体の展示施設などでも活用を予定しており、地域の防災にも役立って欲しいと考えています。また、8KCGなど、8K映像の科学や医療などでの新たな活用の可能性を紹介する企画展を、東京・渋谷の「NHKプラスクロスSHIBUYA」で開催予定です。

Q. 放送が終了した大河ドラマ「麒麟がくる」の感想と、新たに放送が始まった「青天を衝け」への期待は。

A. (会長)「麒麟がくる」についてですが、コロナの影響で、終わる時期がちょっと後ろにずれましたが、私もずっと見ておりました。新しい視点から明智光秀を描いたドラマになったと思います。昔のドラマを見てみると、光秀はこういう人だという先入観がありました。どうもそうではなかったのではないかと、そういう本もだいぶ出ましたが、冷静に考えると、歴史というのは、勝った人がつくった歴史が残って、負けたほうは、どうも歴史から消え去る。真実は何だったのかというのを改めて考えさせられたような番組だったと思います。そういう意味で、ちょっと違った形で描けたのではないかと思います。最後は光秀が頭にきてやったと、私は単純に思い込んでいたんですけど、どうもそんな単純な話ではなかったのではないかと、そういうことを考えさせられました。

渋沢栄一の大河ドラマは、まだ始まったばかりですけども、出だして、いきなり徳川家康が出てきて、私もびっくりしましたが、どういう関係があるのかよくわからなかったんですが、江戸が終わって明治になる。そこをつないだ時期、そういう時代に渋沢栄一は生きていますので、おもしろそうだなと期待しています。また、新しい一万円札の顔になるわけですから、そういう意味でも期待しております。

Q. 渋沢栄一は、会長がいた、みずほ銀行のルーツとなる第一銀行をつくった人だが、特別な思いはあるか。

A. (会長) 渋沢栄一は、明治の時代に、あれだけたくさんの企業を起こした方で、かつ、非常に倫理観もある方で、本当に典型的な明治の方という感じがいたします。金融機関も設立されていますが、明治の時代にいろんな産業をあれだけ起こしたというのは、まさに、日本の資本主義を作った方だと思います。その割には、あまり知られていないという部分もありまして、今回、どういう形でドラマが進展して

いくかわかりませんが、よい形で進展すると思っております。

Q. 先月26日に放送法改正案が閣議決定されたが、受け止めは。また、総務省で不祥事があったが、その影響については、どう考えているか。

A. (会長) 放送法の改正案を閣議決定していただきました。以前から、受信料を還元するために勘定科目を新しく作っていただきたいとお願いをしておりましたし、受信料徴収のもとになります受信機をお持ちの方に我々のほうにもご連絡いただきたいという、そういうお願いもしてきました。それから、関連会社を合理化する過程で、中間持株会社を使った形で合理化のスピードを上げさせていただきたいということで、中間持株会社を設立することもお願いしておりました。そういうことも含めて、放送法の改正案ということで取り上げていただいたと思っております、期待をいたしております。

総務省の不祥事と放送法の関係につきまして、私どもがコメントする立場にありませんが、国会で、しっかりと審議していただいて、通過させていただければなと思っております。

Q. 総務省の不祥事に関連して、国会で総務省との会食が質問されていたが、会食があったのかなど、調査をしたのか。

A. (会長) NHKの職員に、接待費というものを支給しておりませんので、そういう勘定科目はないんです。ただ、役員については、役員交際費というのがありますが、金額の総額を毎年公表しております。昨年度、役員12人で、1200万円ちょっとだったかと思えます。冠婚葬祭など儀礼的なもの、すべてを含めての金額でございます。中身を公表するかというのは、相手方のこともございますので、これはちょっと勘弁していただきたい。申し訳ないんですが、事業に支障が出ますので。総額は公表していますので、ご覧いただきますと、そんなに巨額なお金ではございません。公共放送ですから、非常に少ないんです。その内容については、経営委員会と監査委員会にチェックしていただいています。経営委員会、監査委員会から、不適切だとか、問題があるとか、そういう指摘をされたことはございません。国会でも、なぜ言えないんだと質問されたんですけど、NHKの仕組みは経営委員会と監査委員会チェックする。第三者機関と同じ扱いの独立した経営委員会と監査委員会で、われわれは監視される側ですから、チェックを受けた上でやっております。

また、私が会長に就任以来、何か接待をして、何かをやってもらうというようなことは一切するなど申し上げていまして、お願いする時は正々堂々とお願ひすべきであると、そういうことではないかと思ひますし、今後とも、そういうふうにやっていきたいと思ひております。

Q. NHKでは、12人の理事のうち女性は1人のみだが、女性登用について、どのように考えているか。

A. (会長) 私は、女性登用について、銀行に勤めていた時代から、ずっと積極派なんです。NHKがこれまで採用してきた実績が、圧倒的に男性が多い時代が長くて、残念ながら、現在の構成員の中で、女性の比率が非常に少ないんです。これを改善していくには、どうしても入口のところで、まず是正しないと永遠に変わりませんので。現在、採用のところは40%から50%、ほぼ半々ぐらいまで女性を採っておりますので、こういうのが10年ぐらい続いてくれないと、ストックベースで女性の数が増えないものですから。理事も今1人しかいませんが、私は積極的に登用したいと思ひているんですけど、母数が如何せん少な過ぎるので、もうちょっとお待ちいただきたいと思ひます。ただ、局長級になりますと、かなり母数が増えていますので、今回、地域放送局長を社内で公募しまして、123人の方が手あげていただいて、かなりの数、女性が入っております。対象の年齢は、40歳から50歳ぐらいのところ公募したんですけど、その年代でもかなり入っていましたので、もう少し時間が経てば、もうちょっとバランスがよくなると思ひます。日本全体で見ても、女性が活躍するいろんな会議とかに出ましたけど、女性が少ないです。国会議員の数を見てもそうですし、全体に少ないんで、ここはもうちょっと多いほうがよいなど。私は基本的に積極派なのですが、採用のところで、母数が増えないと、なかなか難しいなど非常に気にしているところでもあります。いずれにしても、方向とすれば、女性を積極的に登用する方向に行くべきだと思ひますし、行かせたいと思ひております。

Q. NHKの受信料制度等検討委員会の中にある「次世代NHKに関する専門小委員会」で議論がされているようだが、答申は公表する予定か。

A. (会長) 今のところ、まだ検討している最中なんです。その先をどうするかというのは、まだ考えておりません。

Q. いつ頃、報告書をまとめる予定か。

A. (会長) なるべく早くと言っていますが、次世代の委員会は、幅広く検討してもらっていますから、そう簡単にパッと出せないんです。ですから、答申が出た後どうするかは、検討させていただきます。

Q. この委員会で、地上契約と衛星契約の受信料をまとめた総合受信料も検討するのか。

A. (会長) ここでは検討しないのではないですかね。受信料については、受信料を研究するところがありますので、そっちでやることになると思います。次世代のほうは次世代で、テーマは別ですので、別ととっても、もちろんかぶっているんですけども、こちらの委員会の幅は圧倒的に広いんです。ですから、そっちはそっちでやってもらいたいと思っています。

(以上)